

6. ディスカッション

<パネラー>

MICHELLE KOH 氏（シンガポールリバーワン（SRO）/エグゼクティブディレクター）

李 政炯氏（韓国中央大学教授）

田口真司氏（一般社団法人大丸有環境共生型まちづくり推進協会事務局次長）

上溝憲郎氏（大阪市都市計画局うめきた整備担当部長）

橋本英仁氏（阪急阪神不動産株式会社開発事業本部うめきた事業部副部長）

<ファシリテーター>

吉田恭氏（京都大学経営管理大学院特定教授）

（司会）これより『ディスカッション「アジアと考えるエリマネ、創造性、社会的課題」』を始めます。ディスカッションに参加いただく皆様をご紹介します。コーディネーターを務めていただきますのは、京都大学経営管理大学院特定教授 吉田恭先生です。続きまして、パネリストの方を紹介いたします。パネリストの皆様のプロフィールにつきましては、本日お配りしております次第の裏面をご覧ください。まず、シンガポールよりお越しいただきましたシンガポールリバーワンエグゼクティブディレクター、Ms.Michelle Koh、韓国よりお越しいただきました韓国中央大学教授 李政炯様、エコツェリア協会事務局次長、三菱地所株式会社開発推進部マネージャー 田口真司様、大阪市都市計画局うめきた整備担当部長上溝憲郎様、そして阪急阪神不動産株式会社開発事業本部うめきた事業部副部長橋本英仁様、以上の皆様にディスカッションいただきます。ここからの進行は吉田先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（吉田氏）ここからは、アジアの先進都市のお客様と一緒に「アジアと考えるエリマネ：創造性、社会的課題」というテーマで議論を続けていきたいと思えます。今回のテーマ「都市の創造性」には前段がありまして、この前段を考えると、少し話がつながってくると思えます。アジアの大きな社会的問題は何かというと、高齢化です。日本の『高齢社会白書 2018 年』によると、日本は飛び抜けて高齢化が進んでいます。ところが、アジアの都市はとても早いスピードで高齢化が進み、高齢化率では 20～30 年後には、日本と韓国とシンガポールが上位独占という状態になります。それに伴い、様々な問題が生まれてきます。生産年齢人口の減少が、都市の活力、創造性、国際競争力に影響しないか、アジアの都市は活力を維持できるかという問いに対して、創造的でイノベティブな都市のためにエリマネは何ができるか、エリマネが健康づくりに貢献できないかということを議論していきたいと思えます。健康づくりは、エリマネの得意分野でもあり、このあと大丸有の田口さんから、ラジオ体操の話をしていただけるということなので、私のほうからは、大丸有での綱引き大会をご紹介します。大企業が揃って昼間から開催する綱引き大会で、参加チームも増えています。会社ごとのチームになるので、異様な雰囲気になって盛り上がります。優勝したチームは、レストランの大丸有エリアのお食事券をもらったり、プロレスラーチームとのエキシビションマッチを楽しむことができます。最初に優勝した三菱地所チームは、なんとプロレスラーチームを負かしてしまったそうですが、

皆さん楽しんでやっています。先日、エリマネの視察でシンガポールを訪問しましたが、シンガポールでは、ヨガや高いビルの階段でのマラソン大会をエリマネ活動として盛んにやっているということでした。

今日は、健康づくりだけではなく、ソーシャルキャピタルを生かして、どうやってイノベーションにつなげていくかということで、話を進めていきたいと思います。梅田の近未来を少し調べたところを紹介すると、パーソントリップ調査におけるピーク時（平日 14 時、休日 15 時）の滞留人口は、未成年者は別とすると、若い人ほど多く、70 歳以上になるとガクンと減ってあまり来なくなることが分かります。このまま高齢化が進んでいくと、試算では、2015 年の人口ピラミッドの未成年世代が梅田に来るようになりますが、逆に 70 歳以上になると来なくなってしまう。先ほどの梅田訪問率を固定して、人口構造の変化を見ると、今後 20 年～25 年の間に、梅田への来訪者は全体で 15% くらい減る結果になります。しかも、高齢化しながら減ることになりますので、放っておくと、賑わいが喪失されるのではないかと懸念されます。これは人口構造だけの話で、うめきた 2 期の開発やインバウンドのことなどは考慮していませんが、それにしても、アジアの先進都市は、見た目以上に、このような高齢化によるリスクを抱えていると言えます。これらを前提としまして、高齢化し、生産年齢人口が減少するアジアの都市の中で、テーマ 1 では「エリマネに何が求められているか?」、テーマ 2 では、「官民連携やリーダーシップのあり方は?」ということを議論いただきたいと思います。まず、皆さんに自己紹介を兼ねてプレゼンテーションしていただいた後に、議題に入っていきたいと思います。それでは、ミッシェルさんからお願いします。

(Ms.Michelle Koh (以下、ミッシェル氏)) みなさんこんにちは。まず自己紹介をさせていただきます。私は、SRO (シンガポール・リバー・ワン) のエグゼクティブディレクターをしております。シンガポール川は 3.2km という短い川で、梅田に比べてずっと狭い地域を担当しています。シンガポールに来たことがない方もおられると思いますので、街とシンガポール川の紹介をさせていただきます。シンガポール川は、もともとシンガポールに住み着いた我々の先祖が交易の中心としていたところです。皆さんご存じのマリーナベイ・サンズができるずっと前から、シンガポール川沿いはプレミアな目的地として、多くの人を集めてきました。シンガポール川沿いでは、食べたり、買い物したり、パーティーをしたり、たくさんことができます。

私たちの組織「SRO (シンガポール・リバー・ワン)」のご紹介をします。SRO は 2012 年に設立しましたが、それより前に都市計画を担当する政府機関が様々なところに諮問して、土地開発をどのように進めればよいかという話し合いが始まり、5 年間のビジネスプランを立てることになりました。SRO は、全員専従の職員で構成されており、様々な都市計画を立案しています。民間の非営利団体で、政府とのパートナーシップをとりながら活動しており、現在は 2017 年から 2021 年の 4 年間の計画を採択しています。シンガポール川沿いに、より多くの人を引きつけ、公共空間をより改善されたものにして、地権者にとっても地価の上昇といった貢献をしようと考えています。加盟者数は、2012 年設立当初は僅か 12 名でしたが、現在は 114 名になり、地権者やビジネスをしている方などがたくさん参加してくださっています。これも、成功の証です。ポート・キー、クラーク・キー、ロバートソン・キーという、3 つの地域に分かれています。会員からは、税務の情報をもとに、土地の価格に基づく金額の負担金を徴収しています。4 年間のビジネスプランは、地権者やビジネスをしている方との協議に基づいて立てています。SRO が他の地域と異なるところは、川があることです。川沿いのウォーターフロントには、素晴らしい食事できる場所があります。皆さんにとってもご関心が

あると思いますので、2つの事例をご紹介しますと思います。

一つ目は、ポート・キーのウォーターフロントの開発です。アジアの各都市と同じように、シンガポールもマリーナベイ・サンズができて、競争が激しくなっていました。そこで、政府と、このウォーターフロントをより魅力的にするにはどうすればよいかということを検討しました。1980年代は私たちだけがウォーターフロントのプレミアな目的地であったため、非常にきれいだったのですが、90年代半ばから2000年に入ると、誰も開発をコーディネートしなかったため、かなり雑然とした地域となりました。そこで、管理とイメージを向上するべく、どうすれば建物をきれいな状態にできるか、キャノピー（庇）の改修ができるかを政府と相談して実施しました。政府の説得も大変ですが、何より大変だったのは、レストランの所有者や地権者を説得することで、実際に2年の歳月を要しました。改修にあたり、実際にそこで仕事をしている人、地権者の承認を得なければ、着手することはできません。インフラを整備するために、うめきたのように優れた組織はなく、私たちだけが関わっていたので、私たちが政府や地権者との話し合いを行いました。そして、現在では、住民も旅行者も多くの人々が訪れるようになり、管理も行き届いてきました。素晴らしいお店の展開もあります。

そこで、新たなORA（屋外店舗）によってどのように変化したか見ていきたいと思います。ORAとは、アウトドア、リフレッシュメント、エリアの頭文字をとったものです。以前は、一体感のない構造物がたくさんあり、店と店の間に見栄えのよくないワイヤーも通っていました。そこで、政府はこれを変えようと、屋根のキャノピー（庇）を変え、空が見えるように改善しました。それから、この地域にはもう一つの問題がありました。それは、レストランの客引きがたくさんいたことです。そこで、官民のパートナーシップによって、レストランのオーナーと、レストランの客引きをしないように話し合い、大きく改善されました。2013年のトリップアドバイザーでは、非常に悪質な客引きが多く、星は3つで辛辣なコメントも多く、よい評価が得られていませんでした。ところが、現在、ポート・キーをトリップアドバイザーで調べると、星は4となり、非常に良い評価をいただいています。これは私たちの活動の成果であり、これこそがエリマネ活動の成果だと感じています。

ボード・キーのあるウォーターフロントの裏側に、サーキュラーロードという地域も大きく変遷していますので、二つ目の事例としてご紹介します。非常に短い通りですが、このサーキュラーロードは、金曜日と土曜日は午後6時から午前1時まで、自動車を止めて歩行者天国になっています。歩行者天国になったことで、地元住民が訪れる機会が非常に増えています。これは「セント・パトリックス・デー」のストリートフェスティバルですが、歩行者天国で、様々なストリートフェスティバルを開催しています。そして、第2期プロジェクトとして、ソファやベンチなどのストリートファニチャーを改良して、人々がそこに滞在しやすいようにしました。さらに、地元の学生を巻き込んで、学生たちとサーキュラーロードの見学を行い、どのような設計をすればよいかを検討しています。シンガポール川沿いの大学に通う学生たちも参加しています。DJイベントや様々なスポーツのワークアウトを開催しています。美術学校や音楽学校とも協力しており、地域の音楽学校の学生がミュージシャンとして演奏しています。以上がご紹介になります。ありがとうございました。

（吉田氏） ミッシェルさん、ありがとうございました。官とビジネスオーナーの間に入って、いろいろな苦勞をされているということがよく分かりました。また、音楽学校との協力的な関係など、クリエイティブな活動も行われているということでした。続きまして、ソウルのエリマネの現状につきまして、李先生からお願いいたします。

(李氏) ソウルの事例を紹介してまいります。韓国ではエリマネを「タウンマネジメント」と言っていますが、ソウルでは、2〜3年前から、アメリカと日本の事例を見ながら取り組もうとしている段階です。現在、ソウル市が主導して、ある程度基盤をつくっており、将来的に民間中心でできるようにという話が始まったところです。今回は、この約3年間の取り組みを紹介したいと思います。

まず、旧市街地の都心部に、清溪川（チョンゲチョン）という復元された川があります。そして、ソウル市役所の近く、地図の真ん中にあるムキョウ地区をタウンマネジメントのモデル地区として、パイロット事業を行っています。ここは典型的な都心の業務地区で、特に土日や夜は閑散としています。この地区は1960年代から70年代に再開発されたところで、現在、再生の時期を迎えています。維持管理の面で、何とか活性化をしたいと考えています。

最初に、公共空間をどう生かすかについて、再生マスタープランを作成し、これに基づいて、現地の協議会や住民の集まり等で議論をしてきました。コミュニティミーティングも半年で36回くらい開催し、話の場を広げるために、シンポジウムも開催しました。私は大学という立場で、官である市役所と、民である住民をコーディネートして、このような場をつくったりしました。タウンマネジメント活動には、組織と財源と活動が必要なわけですが、ムキョウ地区では、商店街の協議会や大企業の協議会とソウル市とで、何とかやってみようということで、2016年当初から、ソウル市が財源を出して、プロジェクトをつくってムーブメントに持っていくというように進めてきました。パイロット事業として、「ムキョウテラス」という取り組みを、約1週間、車を通行止めにして行っています。今年も10月に3回目を実施しようということで、予算もついて、現在、準備しています。ここは道路用地として残っている場所ですが、「ドネーションパーク（寄付広場）」という名前を付けて、使う人は小銭を投入するというので、小さなコンテナバスを拠点とした広場をつくっています。2年目になる去年は、より多くの企業の方々に入ってもらい、いろいろな議論を行いました。ソウル市でも、市の予算で、フリーマーケットやドネーションパークでのフェスティバルをコーディネートしたり、雑誌を3回ほど出してPRしたりしています。今年は3年目になり、やっと企業側から積極的に財源をつくり、協定を結んで、その中で何かやってみようという話が出ているところです。これまでは、市の事業で、道路や公園などのインフラ整備をし、屋外での活動も、市の支援により大学の研究室とコンサルとで行っているのが現状です。

もう一つの事例は、最近、汝矣島（ヨイド）で行われている複合開発の地区です。汝矣島は、ソウルの中の3大都市の中の一つで、丸の内のような金融中心の街です。最近開発が進んでいるのですが、地上が閑散としており、ほとんどの商業施設が地下に計画されています。放送局が移転した跡地を開発するというので、現在着工したばかりの複合開発プロジェクトがあり、完成までの2〜3年の間、タウンマネジメントに取り組んでみようということになりました。これは完成後のイメージですが、市と開発者と私たち大学やNPOが組んで、協定を結び、これから2年ほど準備し、完成したら、一つのプロジェクトとして取り組む予定です。韓国の複合開発では、公共寄与と言って、開発者から必ず開発負担金を市に提供することになっていますが、今までは施設や公園などを寄与して終わりというケースが多かったので、今回はこのような公共空間の維持管理に充ててみようということで取り組んでいます。将来的には、近隣にも開発が出てくるので、対象を広げて地域全体を活性化することを目指しています。韓国では、現在、ソウルを中心にこのような動きで頑張っているところです。以上です。どうもありがとうございました。

(吉田氏) 李先生、ありがとうございました。続きまして、田口さんから、社会的課題について取り

組んでいらっしゃる立場でよろしく申し上げます。

(田口氏) 私は、オープンイノベーションと言って、いろいろな企業や行政、民間の方たちといっしょに新しいことを起こしていくという、ソフトな部分をお話ししたいと思います。大丸有をご存じの方も多いと思いますが、改めましてご紹介します。

大丸有は、東京駅と皇居には挟まれた地域であり、28万人の就業者、101棟のビル、4300の事業所ということで、人も企業もお金も集約しているエリアです。大丸有には、まちづくり協議会、リガールレなど、いくつかのエリマネに関わる団体がありますが、私はエコツェリア協会というところにおります。それぞれが役割をもってエリアマネジメントに取り組んでいます。エコツェリア協会は、エコと名前にある通り、環境課題を街で考えていこうという目的で立ち上がった団体ですが、環境だけでなく、特に震災以降、地域の課題や今日のテーマでもある人口減少、地方創生といったことにも携わっていこうということで、現在活動しています。我々の拠点は大手街にある「3×3 Lab Future」というところで、セミナーや交流ができる場所です。人が自然に集まるのは、食事をしたりつくったりすることということで、特徴的なキッチンがあって、そこでいろいろな仕掛けをしています。

実際どんなことをしているかということ、未来について真剣に毎日のように語り合っている「未来予測ブリーフィング」や、大企業が集まっている大丸有で、最近増加している中小企業やベンチャーも組織の大きさの違いを越えて、新しいことをやっっていこうという「大企業×ベンチャー共創」、女性がビジネスだけでなく、生活基盤である家庭なども含めて社会全体で今後どのように活躍していくかということ、当然、男性も女性もいっしょに考える「女性リーダー」などです。他には、「セルフブランディング」といって、自分を前に出すことが日本人は得意ではないですが、自分の色や立ち振る舞いなどを知ろうというセミナーをしています。後は、社会課題である食品ロスについて、食べられない食材がどんどん捨てられていくことを考えようと、子供たちと一緒に、細かく刻めば、野菜もいっぱい食べられるという「チョップドサラダ」という企画もしています。他には、東日本大震災の復興では課題がまだ多く残る中で、メカジキという大きな魚を、みんなで食べながら課題を考える「気仙沼メカジキ発表会」もやっています。我々は、社会課題をしかめっ面で考えても、よいアイデアは浮かばないので、必ず遊びと楽しみを入れながら活動しています。関西に関わることで、昔は各家庭の床柱として使われていた北山杉の街を復興するにはどうすればよいかということ、東京の人たちと、木材森林に携わる人たちが一緒に考える「京都北山杉イベント」を行っています。金融の世界もどんどん変わりつつある中で「ESG 金融勉強会」、10年ほど前から実施している「丸の内朝大学」、4年前に立ち上げた社会課題をみんなで考えながら新しいビジネスを生んでいこうという「丸の内プラチナ大学」といった活動もあります。「丸の内プラチナ大学」は、今では10個のプログラムがあり、最近では国内だけでなく、シリコンバレー、宇宙などのテーマも取り上げています。私も実際に、岩手県の八幡平に行きましたが、各地の課題を、現地にも行きながら一緒に考えることをしています。また、丸の内には、サテライト以外に、大学も高校もないのですが、大学生や高校生を対象に「丸の内サマーキャンプ」を開催しました。大学生には、循環型ビジネスを考えるという非常に難しい課題に取り組んでもらい、7個のテーマが出て、大変素晴らしい結果となりました。高校生には、言われてやるのではなくて、自ら動けるプロアクティブな人材になろうということで、最後一人一人発表してもらいました。思い出だけで涙が出そうですが、3日間で気持ちがどんどん変わっていくことを目の当たりにしました。

JAの皆さんと、大手町、丸の内ではいろいろな地域の特産品を食してもらおうという「『JA 大丸有』

をつくろう！構想」や、今日のテーマでは、丸の内仲通りで、みんなで気軽にできる「ラジオ体操」、芝生を敷き詰めて「丸の内ストリートパーク」など、自然と皆さんが語り合えるような場づくりもしています。

こうした取り組みは、当然、他のエリアにも展開していくもので、今は、いろいろな地域とつながっております。一つには、宮崎県と連携協定を組み、県の職員の方に我々の施設で一緒に仕事をしてもらい、私も2か月に1回宮崎に行っているいろいろな勉強会を行うなどの交流をしています。横浜のみなどみらいにも、オープンイノベーションを目指した施設や活動を作ろうということで、2年前から、「みなどみらいフューチャーセンター検討会」を開始しています。他にも、NTT データが地方銀行と一緒に地域課題を考えるということで設立されたラボ「BeSTA FinTech Lab」の運営をお手伝いしています。また、9月に発表予定ですが、大丸有の地区をもっともっと実験の場、アートラボとして使っていく仕掛けを作ろうということで、「Tokyo Marunouchi Innovation Platform（仮称）」という取り組みを今後進めていきます。

今までの企業観というのは、どこまで売れるか、シェアを増やしていこう、ローカルからグローバル化という右肩上がりの成長曲線でした。でも、これが続くわけではなく、人口も減って価値観が変わっています。これからは、エリアとの共創をどうしていくかが一番のテーマだと思います。我々は、普段いろいろな人が集まれるプラットフォームをつくり、健康や食、女性活躍やシニアなど、皆さんが気になるテーマを通して、ビジネスや社会的な活動に繋げるという取り組みをしています。私は岐阜生まれで、田舎から東京に出ているのですが、東京、大阪は各地域から人が集まってくるので、その特性を生かし、国内外の様々な地域とつながって、よりよい社会をつくっていきたいと思います。以上となります。ありがとうございました。

（吉田氏） ありがとうございます。社会的課題の解決のために、いろいろなことをされているということで、エリマネとの関係についても後程、ご説明いただきたいと思います。続きまして、大阪の「うめきた開発」につきまして、大阪市の上溝部長、阪急阪神の橋本副部長、続けてお願いいたします。

（上溝氏） 私の方からは、今までのうめきたの開発の経過や現状を、エリアマネジメントを中心におさらいさせていただきます。

最初に開発が動き出したのは約30年前で、国鉄の民営化とともに、貨物機能を移転することになり、その土地を利用していこうという動きが出てきました。その後、国際コンペでまちづくりのアイデアを募り、それをもとに、2004年にマスタープランである「まちづくり基本計画」を策定しました。このなかに、当時は、まだあまり浸透していなかったエリマネの組織を設立してまちづくりに取り組む考え方を盛り込みました。また、立地ポテンシャルを生かして、人を集めてイノベーションにつなげる「ナレッジキャピタル」を中核機能とすることや、うめきたの開発効果を周辺にも波及し「大梅田地区」として発展するまちづくりを目指すことが示されました。2006年には、1期の開発事業者が決定し、既にグランフロントとして開業しており、現在、たくさんの人で賑わっています。2013年のまちびらきに先立って、事業者が中心となって、「グランフロント大阪 TMO」というエリマネ組織をつくり、現在は巡回バス、レンタサイクル、広場でのイベント、歩道空間を活用したオープンカフェ等が行われています。まちびらき後の2014年には、地権者から徴収した負担金をエリマネの活動に使っていく「大阪版 BID 制度」を創設し、グランフロントで適用していただいています。

図の赤のエリアが2期ですが、貨物の機能が移転し、2期開発への期待が高まっている中、2015年に「うめきた2期区域まちづくりの方針」を策定しました。『「みどり」と「イノベーション」の融合拠点』をまちづくりの目標に掲げ、周辺と一体となったエリマネ、周辺に進出・波及する「みどり」などのまちづくりの方向性を示しました。2018年に開発事業者が決定しており、現在、基盤整備等を進めているところで、2025年夢洲で開催される万博に先立って、2024年の先行まちびらきを目指しております。2期エリア全体で約16haあるのですが、地区の中央に約4.5haの都市公園を整備することに加えて、他に民間の敷地でも緑化を図り、地区全体の半分くらいの約8haの「みどり」を確保します。更に、この「みどり」を活かして、世界をリードするイノベーションの拠点を目指していこうとしています。

どのように「みどり」を活用していくかを簡単に要約すると、次の3点になると考えています。一点目が、たくさんの方に来ていただける、賑わいの創出に活用する空間となる「みどり」、二点目が、ここで働きたいと思える、優秀な人材を呼び込む環境となる「みどり」、三点目が、イノベーション創出の実証の場となる「みどり」です。今後、事業者の方々に、これらを実現するために、どのような「みどり」にしていくのかを考えていただきたいと思っております。

最後に、2期中核機能のコンセプトとしては、「ライフデザイン・イノベーション」を掲げています。これから高齢化が進んでいく中で、医療や健康の分野は今度さらに重要になると考えており、また関西には、大学や研究機関、企業の多くの集積がありますので、それを活かすことができます。ただ、ここでは、健康や医療だけではなく、生活の質を高めていこうということで、広い意味で「ライフ」という言葉を使っています。どのようにイノベーションを生み出していくかについては、検討途中だと思いますが、次に橋本さんからご説明いただけたらと思います。私の説明は以上です。

(橋本氏) 昨年度のうめきた2期の事業者コンペでの選定時の計画について、2期の特徴であるイノベーションに対する取り組みに焦点を絞って、概要を説明させていただきます。私自身は、2年半前からこのプロジェクトに関わっておりますが、現在は、行政協議と設計が佳境に入っている状況でして、ご説明する内容が変更になる場合もあるかと思えます。うめきた地区は約24haで、大丸有の面積と比較するとかなり小さいのですが、実践連絡会の活動エリアや周辺を入れますと、大丸有と大体同じ規模になります。うめきた2期を開発事業者は、三菱地所を代表とする9社で、私ども阪神阪急不動産株は、開発事業者である阪急電鉄株の代行で企画・運営を推進しています。

うめきた2期の計画では、中央に4.5haの緑の都市公園、北側と南側に併せて4.6haの民間敷地があり、そこに約50万㎡の施設を建設します。用途は、オフィス、住宅、ホテル、商業と、北側に中核機能のイノベーション施設が入ります。全体鳥瞰図は南北が逆になっていますが、ご覧の通り、公園以外の民間宅地も緑化し、全体で約8haの緑を確保します。イノベーション施設は、公園に面した非常に良い場所を設定しています。スケジュール的には、来年度には着工し、5年後の2024年夏に先行まちびらき、全体の完成は2027年の予定です。

みどりとイノベーションの融合のために、大事にしたい方針が3つあります。一つ目は、「みどり」と融合した生命力と活力あふれる、緑豊かな都市空間をつくることです。二つ目は、街のあらゆるところに賑わいや事業創出につながるような活動の場を設けるということです。イノベーション施設の他に、実証実験できる活動の場を配置し、イラストにありますように、先進的で楽しいプレイスメイキングをしていきたいと考えています。三つ目は、そのようなアクティビティ、賑わいや事業創出を支えるマネジメントを組織立てて行うということです。「パークマネジメントとエリアマネジメン

トの一体組織」の図を見ていただくと、左側が1期の運営組織で、中央と右側が2期です。中央が、エリマネジメントと都市公園の指定管理を含む緑の管理、活動促進を担う組織で、MMOと呼んでいます。右側の二つが、イノベーションを支援する組織で、行政と共同で事業者が設立することになっています。行政や経済団体も参画される総合コーディネート機関と、大丸有のエコツェリアのような民設支援組織の二つが一体になって、行政や大学、企業、ベンチャー企業のつなぎ役になってイノベーションを推進することになります。当然、1期のTMOやナレッジキャピタルとも連携し、エリア全体で進めていく考えです。「ライフデザイン・イノベーション」がテーマなのですが、関西のシーズを生かすという考えのもと、産官学が連携した「うめきた共創エコシステム」を構築しようとしています。特に重要なのが、企業とベンチャー、大学が主力のチームとして進めていくプロジェクトです。このエコシステムの特徴は、共創コミュニティが使える実証フィールドが組み込まれていることです。具体的には、ヒューマンデータ活用基盤・ラボが、バイタルデータ（生体情報）を集めて、活用できる仕組みがあるということです。更に、バイタルデータの提供に協力的な市民の組織「市民共創クラブ」が一体となって、共創コミュニティが開発を進める「ヒューマンデータ活用基盤」をつくらうとしています。スポーツの分野で、共創コミュニティの活動を例示しますと、ヒューマンデータ活用基盤に集まってくる個人のバイタルデータや、街でスポーツのサービスを通じて得られる行動のデータを活用して、新たなサービスやビジネスを生み出します。そして、生み出されたサービスやデータが、街に再還元されるという循環をつくっていくことが理想です。実証フィールドを、街全体の緑の中に配置することが特徴になっています。

これから社会課題を解決していく上では、市民が参加する「都市型リビング・ラボ」が、大切な機能になってくると思います。うめきたでご説明しました機能が実現すると、大阪でのリビング・ラボを活性化する素地ができると思います。うめきたの緑は、賑わいだけではなく、イノベーションを起こす場になると考えております。これから、実践連絡会や他の方々とも協力して梅田エリア全体に波及させて、梅田エリアが居心地よく歩きたくなる街になるように、努めてまいります。ありがとうございました。

（吉田氏）ありがとうございました。うめきた2期では、従来型のエリマネ団体の他に、イノベーションのための組織ができるということで、この辺りも後ほど伺いたいと思います。一通り、皆さんにご紹介いただきましたので、冒頭のテーマ設定の通り、アジア社会で、エリマネに何が求められているかについて議論を進めたいと思います。先ほど、ミッシェルさんから、SROでは、客引きの取り締まりや学生のパフォーマンスなど、社会的な課題、クリエイティビティについて工夫されているとのお話がありましたが、シンガポールで最も活発に活動されているBIDであるSROで、プレイスメイキングをする意義をどう考えていらっしゃるかについて伺いたいと思います。

（ミッシェル氏）シンガポールでのプレイスメイキングは、7年前に始まったばかりで、日本やアメリカに比べますと、まだまだ新しい動きです。日本では大企業がインフラ整備にあたって、人的資源や資金を投入されているという話を聞くと勇気づけられます。SROは、シンガポールでは初めてのBIDの組織で、まだ法的な法人格を持っておらず、自主的な組織として活動しています。自主的な組織ゆえに、私たちが地権者や土地の所有者から集める資金と同額を、シンガポール政府から助成してもらっています。ただ、助成には50万シンガポールドルの上限があります。法制化には、より多くの団体の参加が必要ですが、そこまで至っているところが少ないのが現状です。SROがシンガポー

ル最初の組織ということもあり、民間企業からの資金投入にも至っていません。日本では、先の見通しを持って、状況をコントロールしていこうとしているのに対し、シンガポールはまだ日々の成功という短期的な視点での取り組みになっています。

(吉田氏) ありがとうございます。シンガポールの現地を訪問したときは、とてもクリエイティブな雰囲気楽しい場所という印象でしたが、ご苦労があることが分かりました。続いて、李先生に、ソウルでなぜエリマネに取り組まれているのか、特にソウル市が主導されているということで、その狙いについてお願いします。

(李氏) 近年、ソウル市は都市再生時期を迎えており、再開発が行われてきている状況です。これまでの都市再生は、まちを綺麗にすれば済むということでやってきましたが、最近やっと、再開発後の維持管理や街の活性化が重要で、そのためにマネジメントシステムを取り入れようという議論が出てきたところです。また、韓国では、開発の際に公園や道路をつくる基盤整備を行って、インセンティブをもらうというインセンティブゾーニングの制度があるのですが、都心部は、ある程度の基盤整備が出来てきているので、開発後の維持管理に寄与するシステムをつくった方がよいという議論も出ています。開発者が、主体的に持続的なまちづくりを進めていく仕組みとして、タウンマネジメントを取り入れようとしており、ソウル市でも期待しているところです。ただ、インセンティブゾーニングの項目としてはまだ入っておらず、法的には認められていない状況です。法制化するために、事例をつくらうとしているのですが、法をつくらうとすると官僚から事例をと言われて、事例をつくらうとすると、市民から法を先にと言われ、どちらから取り掛かるべきかという問題は、日本も同じかもしれません。最近、ソウル市で、条例をつくってまずはやってみようという動きが出ていますが、条例も根拠法がないと制定できないので、協定をつくり、協定地区だけでも公共空間での事例をつくってみようということで、先ほどの二つの事例をもとに取り組んでいます。ソウル市としても、民間で維持管理に取り組んでくれることは望ましいので、そこに向けて議論を行っているところです。

(吉田氏) 同じアジアでも直面している課題が様々であると感じます。田口さんからは、たくさんの活動をご紹介いただきましたが、これらと大丸有でのエリマネ活動との関係がどうなっているのか、梅田二期での緑やオープンスペースがイノベーションにどうやってつながっていくのかについて、田口さんの見解をお話いただければと思います。

(田口氏) イノベーションでもエリマネでも、私自身は、自分ごとであることが一番大事だと思います。政府や企業がやってくれるのではなく、いかに自分ごとにし込んでいくかということが、イノベーションなりにつながっていくのだと思います。我々仕掛ける側からすると、お膳立てしすぎないことかだと思います。例えばラジオ体操でもすべてをつくりこんでしまうと、お客さんとして「参加してよかった」で終わってしまうので、何かをいっしょにする仕掛けや共通のテーマをどうつくっていくかということだと思います。都市で地方の人口減少や過疎地のことを考えようというのは、なかなか難しいものです。

共通のテーマの中で、多様性のある議論を行うことも大事です。コンビニの営業時間の問題を例にとりますと、24 時間営業は利用者からみると利便性が高いのですが、店舗からすると働き方改革や従業員の確保などの課題があります。立場が変わると意見が 180 度違うので、多様性のある立ち位置

の議論をいかに真剣にできるかということも大事だと思います。お互いにとって何が大事かを追求していくと、解決できることがイノベーションにつながるのではないかと考えています。

エリアに関しては、大丸有、梅田それぞれのリソースが違うと思います。自分たちのエリアに何があるのかと落とし込んで、どういったテーマがあるのかを、常に考えるようにしています。それは、変化するものでも普遍的なものもあり、答えはなく模索しながら、日々動いているのが現状です。

(吉田氏) ありがとうございます。橋本さんは、うめきた2期で二つのエリマネ組織をつくるというお話でしたが、なぜ二つに分けているのか、エリマネ組織にイノベーションはできないのか、その辺りをお聞かせいただけますか。

(橋本氏) さきほどご説明しましたように、うめきた2期にはエリマネと緑を運営する組織と、イノベーションを運営する組織の二種類を設立する予定です。イノベーションを推進し、ベンチャーを起こしていくには、エリマネとは別の高い専門性が求められるため、そこを見据えられる人がいて、専門家と連携できる新たな機能が必要だということで、イノベーション支援組織は分けられています。それらとエリマネ活動が一体となることによって、うめきたならではのリソースになりうるのではないかと感じています。

(吉田氏) これから先の話ですので、じっくりと案を練って実現していただけることと思います。もう一つの大事なテーマとして、官民連携、リーダーシップの問題があります。さきほどのミッシェルさんの説明では、URA(都市再開発庁)というシンガポール当局が、パイロット BID の仕組みをつくって、シンガポール政府として BID を伸ばしていこうとしているわけですが、この仕組みをミッシェルさんがどう評価されるか、シンガポールは政府主導のイメージがあるのですが、ここだけの話ということで、ご自由にお話しいただければと思います。

(ミッシェル氏) 確かに、シンガポールは政府主導の国です。シンガポールの URA は土地利用に特化していますので、さきほどの都市局長のお話のように様々なことを包括しようとする、三つの省庁を巻き込まなければならず、官僚主義的なハードルも高くなります。しかも、URA には執行部門と企画部門があり、企画部門が動こうとしても、いろいろな横やりが入ってきます。このため、ユーザーと地権者の間で共通の目的を見つけていくことが、プレイスメイキングにおいて非常に重要になってきます。政府主導の国の一つの問題として、BID を促進しながらも、政府にもプレイスメイキングを担当する組織が別に存在し、とても複雑な状況にあることが挙げられます。そのような状況で、一般企業には誤ったメッセージが伝わりやすく、企業に参加してもらおうと思っても、政府がしているのに、なぜ自分たちがしなければならないのかという声が出てきます。

(吉田氏) 正直なところを教えてください、ありがとうございます。続きまして、李先生、ソウル市もムキョウ地区で試験的に2年間取り組まれて、民間にバトタッチしていこうとしている時期と聞いていますが、そこがうまくいっているのか、どうあるべきかについて先生のお考えをお聞かせください。

(李氏) ソウルは3年経って、やっと民間へのシフトが行われてきており、持続的なものとするため

に、財源を民間で賄うようにする段階にきています。ソウル市では、街路や広場などの公共空間の再整備はソウル市が負担して実施し、タウンマネジメント活動の財源は、ある程度民間で賄うという戦略で考えています。民間で取り組むにあたって一番難しいところは、公開空地のような公共空間を活用することであるため、協定地区を指定して、条例で協定地区内は民間の財源で活用できるようにできないかという話をしています。民間の活動と公共の役割をある程度分けて、民間に任せる流れをつくっていったらという希望をもって取り組んでいます。

(吉田氏) ありがとうございます。ソウルでは、また違う悩みがあるのがよく分かりました。それでは、田口さんから、イノベーションにおけるエリマネの役割、これを官はどう支えるべきかについて、コメントいただきたいと思います。

(田口氏) 官が民がというソリューションの話になってしましますが、共通のビジョン、問いをどう持てるのかというところがスタートラインかと思います。その上で、例えば、公共空間を使ったリビング・ラボ、つまり街を使った実証実験は、一民間企業では、道路を活用しよう、一般市民を巻き込もうと言ったときに難しいので、そこはぜひ官の方々と一緒にやっていきたいと思います。ただ、手前のテーマが決まっていないところで、やりましょうと言っても、一般の人がついてこないで、そこは丁寧に行う必要があると思います。問いをもって試してみても、この問いが正しかったのかと戻すところを、官民でいっしょにできる仕掛けがあって、その中で民が具体的なソリューションをつくっていったら、官はそのための規制緩和や一般市民を巻き込むところと一緒にやっていくと、役割が自ずと見えてくるのではないかと思います。

(吉田氏) ありがとうございます。エリマネで社会的な課題を解決することや、イノベーションを起こしていくことは、それぞれの国でそれぞれの問題があると感じました。うめきた2期では、緑とイノベーションに取り組もうとしています。高齢化を見据えて、梅田から大阪、日本を支えていくという気持ちでいくにあたり、橋本さんには官に求めること、上溝さんには行政が果たす役割と民間に期待することについて、お話をいただきたいと思います。

(橋本氏) 梅田に高齢者が訪れていないという問題について、冒頭に吉田先生からもお話がありましたが、今回二期の計画で、公園や緑がこれだけ多くできますので、高齢者が街に来るきっかけにもなると思います。それを「市民共創クラブ」の仕組みの中でセグメント化して、例えば認知機能に興味のある方を抽出した場を設定するなどというフィールドをつくっていかうということです。そこから先は、田口さんがおっしゃるように、リビング・ラボのような形で、官民が協力して社会課題に一歩ずつ近づいていき、高齢化社会の先進国として成功事例を生み出していったらと考えます。

(上溝氏) 田口さんが言われるように、民間と行政が共通の認識をしっかりと持つことが大事で、スタート時点でそこがブレてしまうとうまくいかないと思います。そのための旗振り役として、まず行政が頑張る必要があると思います。また、行政の役割としては、ハード面でインフラの整備をすること、ソフト面では、仕組みや制度をつくることで民間が取り組みたいエリマネ活動をサポートしていくことになると思います。うめきたに置き換えますと、鉄道地下化や4.5haの都市公園の土地を買って整備をすることは、うめきたの特徴を生み出す上でなくてはならないものであり、行政の果たす非常

に大きな役割だと思います。今後、高齢化が進んでいく中で、健康や医療がますます重要視され、うめきたでは、健康だけではなく、広くライフデザインのイノベーションをやっていくことになります。大規模な「みどり」はその実現に利用できる格好の材料であり、この材料をどう生かすかは、申し訳ありません、事業者の皆さんに委ねることになりますが、ここが腕の見せ所ということで、これからのまちづくりにおける「みどり」の可能性や、エリマネにおける活かし方を形にさせていただきたいと思っております。行政としてもしっかりサポートしてまいります。

また、橋本さんのお話にもありましたように、組織も十分に整いつつある状況ですので、うめきたと周辺が一体となった大梅田地区全体が成長していくまちづくりへと展開してほしいと思っております。

(吉田氏) ありがとうございます。今日のトピックは、かなり一般的なものでどうなるかと心配していましたが、最後にまとめさせていただきます。

まず、アジア先進都市は課題を共有している点が多いのですが、最も大きなものは高齢化・人口減少の展望で、これは欧米都市にはないわけです。都市の高齢化・人口減少は、都市の活力や生産性を低下させ、医療介護費を増大させる懸念もあります。

前半の都市局長のご講演で、ブライアントパーク等の事例がありましたが、アメリカの **BID** は、行政が十分に機能していない中で、民間の努力で大きな成果を上げてエリアを復活させ、都市を底上げしてきています。一方で、アジアのエリマネは、賑わいづくりから始まっており、社会的認知が十分確立しておらず、商業事業者や自治会・商店会とどう違うのかということをお訊かれる立場なのかと思います。生い立ちも直面している問題も、欧米の **BID** とは違います。ですから、アジアのエリマネは、欧米の先進事例から学ぶことはもちろんたくさんありますが、しかしそれだけではだめで、人口減少・都市の高齢化など社会的課題解決への貢献により、その存在意義を示せるはずではないかと思っております。

今日、シンガポール、ソウルのお話を聞いていて、市民の関心をどう高めていくかなど共通の悩みをお持ちだということが分かりました。これからもいっしょに意見交換しながら、アジア流のエリマネを模索していきたいと思っております。うめきた 2 期がアジアの模範的な事例となるように頑張りたいですし、官のほうでもそれを支えてほしいと思っております。全国の皆さん、シンガポール、ソウルの皆さんにもぜひ見守っていただきたいということで、今日の議論のまとめとさせていただきます。ありがとうございました。